尾道の歴史と遺跡シリーズ

JAPAN HERITAGE
日本遺産

北前船と港町尾道

令和７年３月

江戸時代の港町尾道

尾道が港町としての役割を担うようになったのは、平安時代の嘉応元年（1169年）に大田庄の倉敷地に指定されたことがきっかけでした。

当時は、世羅郡を中心とした大田庄という荘園がありましたが、ここでの年貢を船で積み出す場所がありませんでした。そこで、大田庄に近く、地形が入り組み自然に湾を形成しており、船を泊めやすかったため、年貢積み出し港としての機能を果たすようになったのが尾道です。その後は、年貢だけでなく様々な商品も輸送するようになり、ますます港町尾道は発展することとなりました。

▲『紙本著色尾道浦絵屏風』（尾道市立美術館）

江戸時代になると、尾道に「北前船」が寄港します。北前船は、東北や北海道の米や産品を積み込み、日本海側を進んで下関を廻り、瀬戸内海を通って大坂へと向かう船のことです。北前船が通る航路のことを「西廻り航路」と言い、多くの船が利用するところとなりました。

この船は、港に寄る度に現地の商人や、同じように船でやってきた商人たちと、積んでいる商品の取り引きをしたり、新たにその土地の品物を積んで商売をしながら航海をしていました。北海道や東北の各地からは、穀物（米など）や干鰯、昆布などが運ばれ、尾道からは、塩や畳表、酢などが積み込まれました。古くから、瀬戸内海でも大きな港町だった尾道は、北前船やその他の船がたくさん立ち寄る港町として、さらに発展することになります。そして、港町の発展は、多くの商人が集まる町となり、埋立工事も行われ、町が拡大していきます。

日本遺産　公式サイト
『荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～』

豪商と尾道の文化

江戸時代には、北前船寄港により商工業、金融業などが大きく発展し、数多くの豪商（大商人）が生まれました。港町尾道では、灰屋橋本家などの豪商が、町の発展に大きく貢献し、商人たちを取りまとめるとともに、尾道独特の「茶園文化（さえんぶんか）」が生まれました。

港町尾道の商人たちは、江戸時代から明治・大正時代にかけて、港町の中心部や、見晴らしのよい斜面地に庭園つきの邸宅や別荘を築きました。そこには、頼山陽（らいさんよう）や菅茶山（かんちゃざん）、田能村竹田（たのむらちくでん）、平田玉蘊（ひらたぎょくおん）などの文人が訪れ、商人たちと交流することにより、尾道の文化は大きく発展しました。

▲北前船絵馬（浄土寺）

爽籟軒（そうらいけん）庭園（尾道市名勝）

江戸時代の豪商「橋本家」の別荘で、趣向を凝らした庭園や茶室は、当時の豪商や尾道の繁栄の歴史を感じさせます。市重要文化財である爽籟軒茶室「明喜庵（みょうきあん）」は、京都山崎にある国宝「妙喜庵待庵（みょうきあんたいあん）」の写しで、日本に数例しかなく、歴史的資料としても貴重な文化財です。

広島県尾道市久保２丁目6-6
開園日：土曜日曜祝日　入園料：一般100円

▲爽籟軒茶室「明喜庵」

▲挹翠園跡出土土器（茶器）

挹翠園（ゆうすいえん）跡

千光寺山東麓に所在する、江戸時代中頃に造られた茶園です。現在は周辺の宅地化により大部分が失われていますが、発掘調査により茶器や井戸跡などが確認されています。当時の庭園の様子を頼山陽は「遊挹翠園記」に記しています。

▲尾道市重要文化財『紙本著色尾道絵屏風』(浄土寺)

4 港町尾道の姿

江戸時代の尾道を描いている絵図として、安永3年(1774年)の「紙本著色尾道絵屏風」(尾道市重要文化財)があります。これは向島側からみた尾道の様子を鮮明かつ詳細に描いており、商家や民家が密集して建ち並び、海岸を埋め立てている様子などがよく分かります。

絵屏風の尾道水道には、多くの船のマストが描かれ、北前船などの大小様々な船舶が寄港し、停泊しています。護岸は石垣で造られていて、雁木が見えます。雁木とは、船着き場にある石階段状に造られた構造物です。潮の満ち干などで水面が上下しても、その高さに合わせた石段から渡し板をかけて、停泊させた船から荷下ろしをしていました。現在の尾道では、雁木が一部復元されています。

絵屏風の中央、住吉神社の近くには、荒神堂浜と薬師堂浜が描かれています。ここは、海に突き出しており、大量の荷物の積み下ろし、積み込みができる場所でした。

荒神堂浜の東側は住吉浜と呼ばれていました。現在でも住吉神社玉垣には、数多くの北前船主の名前が刻まれ、常夜灯や力石など、港町尾道を代表する石造物が残されています。

▲現在の住吉浜

薬師堂浜の東側(現在の尾道市役所周辺)は、雁木と石垣で構成された入り江となっていて、荷物を大型船から運ぶための小舟がありました。多くの北前船が寄港できるよう、港の整備が行われ、目の前には問屋兼倉庫となる建物が建ち並んでいました。現在でも海岸通には、当時の倉庫だった建物が残っています。

絵屏風右側の厳島神社南側の地域は、江戸時代に埋め立てられ、新開、新地と呼ばれ、絵屏風には埋立地のみで建物はほとんど描かれていません。建物が建ち始めるのは江戸後期からで、後に歓楽街として尾道を代表するエリアとなりました。

また、西国街道(現在の本通り商店街)沿いには、尾道町奉行所や本陣(笠岡屋)、脇本陣、橋本家などの豪商の商家が軒を連ね、江戸時代には宿場町としての機能を果たし、西国街道を中心にして町が形成されたことがわかります。

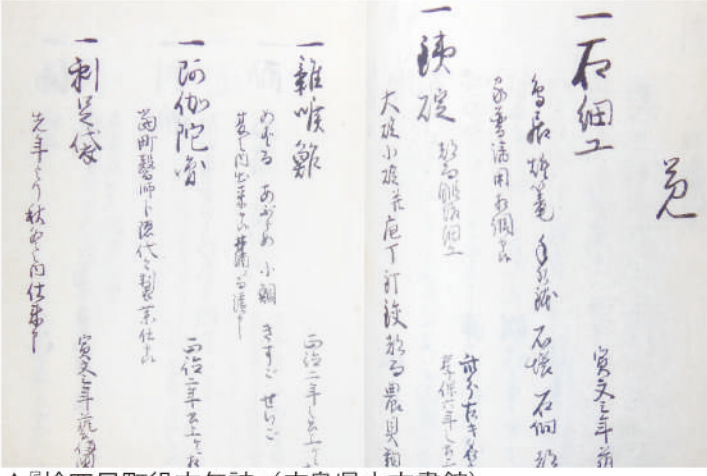
絵屏風には、多くの寺社が山裾に並び、そこへ続く参道や小路描かれています。尾道独特の町並みは当時から形成されており、その様子は現代までほとんど変化していないことがわかります。

▲住吉神社常夜燈

▲浄土寺多宝塔(国宝)

港町尾道から運ばれたもの

文政8年(1825年)に尾道の名産品を書き上げた記録『拾四日町役方年誌』には、燈籠や狛犬などの「石細工」「鉄碇」「編笠」「刺帆」「酢」「渋」「塩」「畳表」などが挙げられています。特に石細工と鉄碇、酢などは、北海道や東北の日本海側などの遠隔地にも運ばれ、現在でも狛犬や鳥居、酢瓶などが残されています。他に古着、空豆なども史料で確認できます。



▲『拾四日町役方年誌』(広島県立文書館)

▲明治時代の引き札(尾道市所蔵)

酢

尾道の酢の製造は、江戸時代以前に遡ります。豊臣秀吉が朝鮮から酢醸造の職人を招き、尾道の酢醸造の歴史が始まったといわれています。北前船によって、秋田米が運ばれ、尾道米酢の原料となりました。北前船の時代には、尾道米酢は最良品として、全国的に有名で、現在でも北海道や日本海側の寄港地には尾道と書かれた酢瓶が数多く残されています。

▲酢瓶(尾道市所蔵)

鉄碇

鉄碇は、尾道の鍛冶屋町で造られていました。元々、江戸時代以前には刀が生産されていましたが、江戸時代になると、碇(いかり)や鍬(くわ)、鋤(すき)、鎌(かま)などの農具が多く生産されています。絵馬に描かれている北前船には、四爪碇(よつめいかり)が描かれているものもあり、北前船の重要な装備品だったことが分かります。

▲北前船絵馬(浄土寺)拡大

▲鍛冶屋町古写真(尾道学研究会蔵)

石細工

石細工がたくさん運ばれた理由として、材料となる花崗岩が近隣で採取できたこと、腕の良い石工が数多く活動していたこと、北前船等の海運が発達していたことなどがあげられます。神社にある狛犬の中には、丸い玉に前足を乗せた「玉乗り狛犬」があります。玉乗り狛犬は、北海道小樽市や函館市、新潟県糸魚川市、胎内市、富山県射水市など、日本海側の寄港地に点在しています。他にも寄港地の主要な神社の鳥居や燈籠などに尾道石工の名前を見ることができます。まさに江戸時代の尾道ブランドが残されています。

▲玉乗り狛犬（尾道市　厳島神社）

▲玉乗り狛犬（函館市　厳島神社）

▲尾道石工が製作した石鳥居（新潟市　白山神社）

塩

塩は、尾道周辺に点在していた富浜塩田（向島）、吉和塩田など、江戸時代から大規模な塩田で生産されたものが北前船で運ばれていきました。また、港町瀬戸田でも、生口島の塩田で大規模に生産された塩を日本海側に運んでいました。

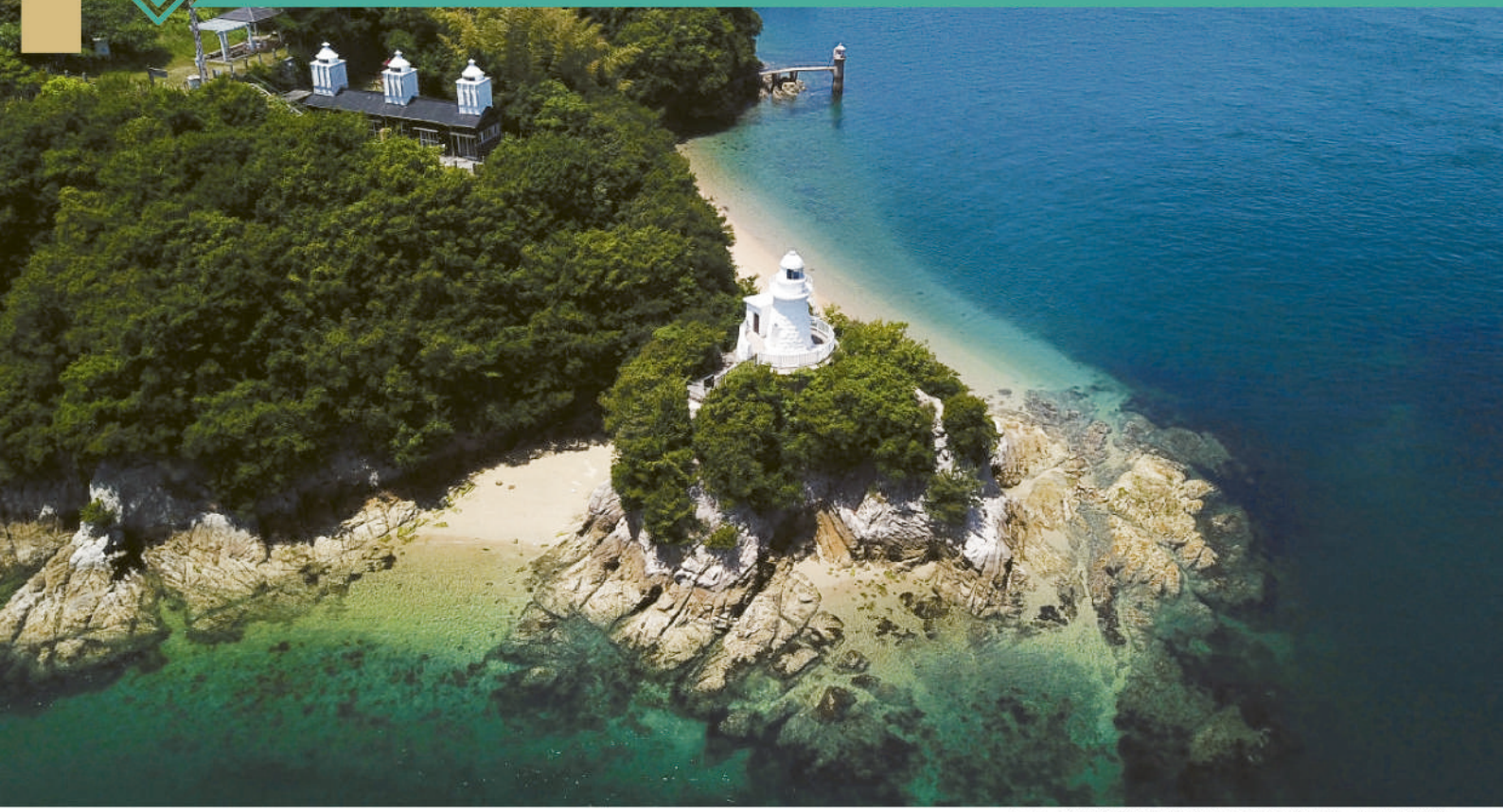
渋

渋は柿渋のことで、防腐作用があるため、様々な用途に使用されてきました。特に港町では漁業の網や船の材料に塗布されて、珍重されてきました。

刺帆

刺帆は、綿布を2枚から3枚重ねて、つなぎ縫いをしたもので、港町尾道では家内工業として発展しました。高砂の工楽松右衛門により松右衛門帆が開発されると、織布工業が備後地方にも広がり、特に明治時代になると、尾道周辺でも帆布工場が建ち、産業として発展しました。

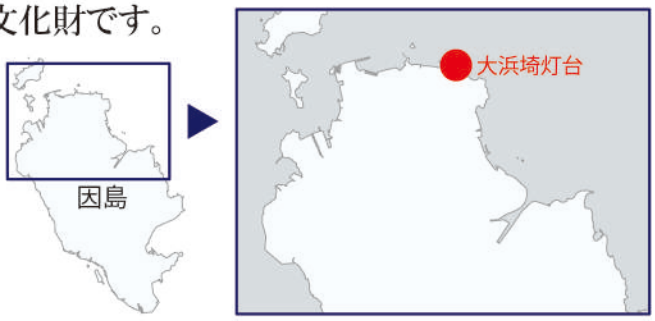
北前船など航路と灯台



▲旧大浜埼通航潮流信号所施設（撮影　村上宏治）

北前船が活動していた明治時代は、造船技術や操船技術が発達し、また、石炭等の動力が加わるなど、海運が大きく発展した時代でした。ただ、瀬戸内海には、いくつかの海の難所があり、港町尾道周辺の芸予諸島を抜ける航路もその一つでした。明治27年（1894年）に来島海峡を迂回する三原瀬戸～布刈瀬戸航路に8つの石造灯台と1つの灯標が設置されました。その一つが、因島の大浜埼灯台です。さらに海上交通の安全性を高めるため、明治43年（1910年）に大浜埼通航潮流信号所が設置されました。

船の通航のための信号を送る通航信号塔や潮流を知らせる昼間潮流信号機などが全て原位置に完存する、日本で唯一の遺構として、令和6年に重要文化財に指定されました。北前船の時代の海上交通史を物語る貴重な文化財です。



▲夜間潮流信号塔（大浜埼灯台）

▲通航信号塔